2002.10.3　東京新聞日曜版

TOKYO どんぶらこ

青山 保

●●141

海舟の叱咤が聞こえる

本所吾妻橋の交差点は道路交通の要衝だ。西から浅草通り、雷門通りが集まるだけでなく、三ツ目通りは北へ行くとそのまま水戸街道となる。

この三ツ目通りは、交差点から南に、どこまでも真っすぐという感じで延びている。おそらく東京でこれだけの距離を真っすぐ行く道はほかにないだろう。

なぜこれほど立派な道をつくったのかというと、三ツ目通りは言問通り、外苑東通り、六本木の桜三と合わせて東京の「環状二号線道路」とする計画だ。だが、はかができていない。

墨田区役所（いわゆる本所）と江東区北部には、東京には珍しい碁盤の目の都市構造ができている。

この碁盤の目構造は、関東大震災の惨禍を経て震災復興でつくったものだが、「江戸時代、本所に囲碁の家元、本因坊が住んでいたからもともとそういう考え方があった」という説がある。三ツ目通りというネーミングも、隅田川から数えて、一の橋通り、二ツ目通りとあって、三ツ目なのだ。

江戸時代から、特に明暦の大火のあと、市街地の外延化にともなって旗本・御家人をはじめ多くの人が本所に住んだ。勝海舟も本所に住んだ。銅像が本所吾妻橋の交差点すぐ、墨田区役所の横にある。

明治維新のとき勝は幕府に背走して官軍の西郷隆盛と交渉し、徳川慶喜の助命、徳川家の存続と引き換えに江戸城を無血で官軍に引き渡した。おかげで江戸の街は戦火に見舞われずにすんだ。だから東京の人は勝海舟にもっと感謝していい。

西郷さんの銅像は豊かな上野公園から参道を見下ろしているが、勝の銅像は、隅田川を前に堂々の力を向いて静かに立っている。私はこういう謙虚な姿勢の方がずっと好感がもてる。

勝の家は、祖父の代から旗本になった。旗本になっても、役がつかなければただの下級武士だ。それが幕末の動乱の中、咸臨丸でアメリカに渡り、幕国として世界を渡り、官軍との交渉の責任者になった。激動期に、エリート官僚たちは役に立たず、市民出身者が活躍した。幕府崩壊後の責任者大鳥圭介も数は前に旗本になった人だった。

勝の銅像が立っているのは、西かけて大上地盤にした道路のようだ。一段高くなっているから、ここから見る隅田川の水面は、低いところから見る水面よりずっと広く豊かに見えて気持ちがいい。

勝は毎日、隅田川を見ながら、「おれたちはやることをやったよ、どこでお前さんたちは何をしてるのかね」と私たちを叱咤しているにちがいない。ひたすら真っすぐな三ツ目通りに立ると、勝の声が聞こえるような気がした。

（作家・明治大学大学院教授）

◆次回は、鳩ヶ谷（埼玉県）です◆

TOKYO　どんぶらこ

明治大学大学院教授青山やすし先生の連載で楽しく拝見しておりました。今まで二度ほど勝海舟を取り上げて頂き、銅像設立関係者はPRになると喜んでおりました。六月二十日号も紹介させて頂きました。初回に続いて今回は海舟についての記述が三分の二ほどありました。私共銅像建設にあたって「隅田川に向かって指さす海舟像」で、隅田川は遠く太平洋につながり、その先は咸臨丸が目指したアメリカにつながる、世界は一つ世界平和の発信基地としてという意味合いで銅像作者の木内禮智先生に説明・納得して頂き、あのスタイルになりました。私共の中で誰一人皇居（旧江戸城）に向かって立つとは思いも寄りませんでした。「勝海舟の銅像を建てる会」全員脳裏になかったことなので、あの記事を読んだ知らない人たちは、旧幕府への忠誠を思い江戸城を向いていると勝手に解釈されては困るところであります。

ご理解の程お願い申し上げますと共に悪意ではなく著者とカメラマン氏の勇み足かと思われますので、注釈付でHPに掲載させて頂きました

イザヤペンダサン著「日本人とユダヤ人」には「海舟こそその時代の第一級の人物で、これほどの人物は全世界を通じて一世紀に一人も出まい」とまで述べられております。それこそ海舟の叱咤が聞こえるカナ。